平成23年度　矢掛町立中川小学校学校評価書

校長　　堀口　映子　　印

本校のミッション
①学校教育目標「豊かな心をもち，たくましさと自主性に充ちた子どもの育成を図る。」の達成 ②矢掛町中川地区自慢の学校として，保護者・地域住民に親しまれ信頼される学校となること 子どもが楽しく喜んで来る学校 学校大すき　友だち大すき　先生大すき

学級数	6学級	児童（生徒・園児）数	89人
職員数	12人	家庭数	68戸
学校運営協議会委員	岡山県立大学教授 中川公民館長 民生委員長 中川保育園長	中川小学校学校支援支援コーディネーター 中川福寿会長 本堀駐在所員 中川小学校 PTA会長	
専門評価委員	岡山県立大学教授		

A　成果をあげている　B　ほぼ成果をあげている　C　あまり成果をあげていない　D　成果をあげていない

	領域	中期目標	単年度目標	具体的計画	達成基準	自己評価	評価
1	進んで学ぶ子ども	確かな理解と充実感が味わえる授業の工夫と改善をする。	算数・国語科の指導法の工夫を行うことで，学習内容の確実な習得を図る。	「教えて考えさせる」授業実践 予習を授業に生かす工夫 ・家庭学習の手引きの徹底 補充学習の取組 校内研修の充実 ・外部講師を招いて分かる授業実践の研修会をもつ。	子ども達が分かる授業を創造できたか。 ☆算数・国語科の内容が8割以上理解できている子が，80％以上いる。 ・一人年間最低2回研究授業実践をする。	1学期に1回，計2回研究授業をすることで，教師も子どもも学習の流れを明確にした授業に取り組むことができた。算数も国語も，どこをどう深めるか研修している。今後もさらに研究が必要である。	A
					☆学び方，学習習慣づくり，予習ができている子が80％以上いる。 ・個人懇談・学級懇談・全体懇談会等を通して徹底を図る。	4月と9月の学級懇談会や参観授業を通して，家庭学習について話し合いをもつことができた。算数は予習を中心にした家庭学習が定着し，学習が深まりつつあるところである。	B
2		日本語や英語でコミュニケーションする力を育てる。	十分に教室内に響き渡る声量で,かつ滑らかな調子で音読や英語ができる子どもを育てる。	全学年で朝の時間に音読 毎日の家庭学習で音読の練習 ALTとの連携 5・6年英語活動（35時間）， 1～4年英語で話そう（25時間）	子どもたちの音読の力は伸びてきたか。 ☆国語の一題材を最後まで音読できる子が90％以上いる。	朝の音読や家庭での協力により，音読の力が向上してきた。各学年の音読の成果を児童朝礼等で発表することによって意欲づけにしたい。継続して取り組みたい。	B
					子どもたちが進んで英語を使うようになってきたか。 ☆英語活動の時，単語や文をはっきりとした声で言う子が80％以上いる。	ゲームを取り入れた楽しい英語学習を毎回実施しているので，子どもたちが生き生きと英語学習に取り組む姿が見られる。自信をもって発音できる子が増えている。保護者への英語授業公開も5学年ができた。進んで公開し，保護者に理解してもらう予定である。	B
3		国語科や算数科の基礎基本が確実に定着した子どもを育てる。	該当学年の漢字の読み書きや計算の大体ができるようにする。	チャレンジタイムを設け，単元ごとのプリントを使った進度別ドリル学習 漢字の統一指導 学習支援ボランティア・やかげ学との連携	子どもたちの漢字を書いたり，読んだりする力は伸びてきたか。 ☆漢字を8割以上書ける子が，80％以上いる。	ほとんどの児童は，家庭の協力もあり，国語の基礎基本が定着している。宿題やチャレンジタイムの漢字練習に前向きに取り組んでいるため，力が伸びてきている。	B
					子どもたちの計算力は伸びてきたか。 ☆計算を8割以上正解する子が，80％以上いる。	宿題やチャレンジタイムの計算練習に前向きに取り組んでいるため，力が着実に伸びてきている。やかげ学や学習支援ボランティアの皆さんの協力（丸つけ，励まし，そしてプリントの採点など）もあり，子どもたちが喜んで計算練習を続けている。子どもたち自身も計算力がついたことを自覚しており，より一層力を伸ばしたい。	A
4	元気で明るい子ども	基本的な生活習慣の定着を図る。	「中川あ・は・は」(早寝・早起き・朝ご飯)運動を充実させる。	毎月の定期点検による意欲喚起 児童・保護者に対する効果的な指導啓発	「早ね・早起き・朝ご飯」の習慣が定着してきているか。指導啓発できたか。 ☆中川「」あはは」が守れている子が80％以上いる。 ・講演会等で保護者に指導啓発する。	ほとんどの児童は，家庭の協力もあり，定着している。一部にみられる夜遅くなる子については，家庭啓発による協力を求めていきたい。9月の参観日に，「早ね・早起き・朝ご飯」についての教育講演会をもち，啓発することができた。	B
			「矢掛町あ・は・は」運動を全校挙げて推進する。	各学級で合言葉を朝の会等で唱和 児童朝礼の際に，児童に呼びかける。 児童の週目標に定期的に取り入れる。	「挨拶・履物・はいと言う返事」の習慣が定着してきているか。指導啓発できたか。 ☆矢掛「あはは」が守れている子が80％以上いる。	学校でのはきものそろえは，一部の子がまだできていない。挨拶が大きな声でできている子が増えた。職員だけでなく，地区の皆さんの声かけのお陰で少しずつ挨拶の輪が広がっている。「矢掛あはは」は，まだまだ不十分である。	C
5		遊びを通して，進んで体を鍛えようとする態度を育てる。	昼休みには友達と遊んで体を鍛える子どもを多くする。	のびのび昼休みの時間を設定(30分) 学級遊びの充実	休み時間には意欲的に外で遊び，体を鍛えようとする子どもが育ったか。 ☆1日に1回は外で遊ぶ子が80％以上いる。	縦割り班活動や班遊びが年間6回程あり，学年に関係なく遊ぶことができている。具体的には，縄とび集会のための練習日を設けることによって，外に出る機会を増やした。一部に教室や図書室で過ごすことが多い子もいるので，1日に1回は外遊びをするよう声かけを引き続きしていきたい。	B
6		学校内や登下校での児童の安全に配慮した管理・指導を行う。	安全管理・指導体制の見直しを図り，新たな課題は適時に改善する。 児童の危険予測と適切な判断につながる指導を心がける。	校内の安全点検の実施，下校指導 安全・防犯訓練を実施 警察等との連携協力 児童の危険予測・判断を促す働きかけを場をとらえて行う。	安全教育や安全指導を適切に実施しているか。 ☆安全・防犯訓練を予定通り実施したり，状況に合わせて実地指導を適切に行ったりする。 ☆場をとらえて，児童の危険予測・判断を促す働きかけを行う。	防犯訓練とともに，折にふれ防犯指導を続けて行っている。年4回の避難訓練を計画的に行っている。毎月2回定期登校指導を行い，実地での指導と教職員の情報交換を行い，学級等での事後指導に役立てた。今後も防犯指導や見守り活動を続ける必要がある。毎週水曜日は，中川子ども見守り隊の活動が定着し，子どもたちが安心して下校できる。	A
7	優しく仲のよい子ども	子どもの心に寄り添う教育相談や支援を行う。	教育相談体制を充実させ，課題に即応する生徒指導を行う。	教育相談日を設定 職員朝礼で気がかりな子どもの情報交換	子どもの話をよく聞き，問題があれば学級や職員ですぐに解決しようとしたか。 ☆その日のうちに解決を図ろうと対応する。	気になる児童の情報交換とともに，担任以外の教員も該当の児童に関わるなど，全職員で取り組もうとする体制がとれている。また，学級の問題は，担任だけでなくみんなで解決するようにしている。	B
8		いじめや不登校の生まれない環境整備と対応に積極的に取り組む。	学級集団づくりに重点を置き，内面外面からの具体策を行う。	友達の良いとこ探しやありがとうカード，なかよし遊びなどを企画。なかよし調査の実施。いじめに関する一貫した指導体制の確立。	互いを尊重し，助け合える人間関係づくりを学級で行えたか。 ☆なかよし調査で，友達と楽しく過ごせていると答える子どもが80％以上いる。	相手の気持ちを考えて発言したり，行動したりできなかった事例がどの学年も何件か発生した。その事例を基に，クラスで「仲良く楽しく助け合う人間関係」について話し合う事ができた。ソーシャルスキルの書籍を購入し，学級で活用している。相手の気持ちを考える機会と言葉の大切さを学ぶ機会を，さらに多くする必要がある。	B
			縦割りグループを活用し,上級学年児童が計画を立て下級生をリードする学校行事を実施する。	色別活動,一年生を迎える会、秋の遠足で自主的活動を意図的に実施	児童会活動や遠足・宿泊的学校行事で子どもたちの主体的な活動が創造できたか。 ☆児童会活動や行事で主体的に活動した子どもが80％以上いる。	それぞれの学年にリーダーシップや役割を担う機会があり，行事をやり遂げるたびに児童が成長している様子が目に見えて分かる。集団下校の時に，みんなの前に出て自分で考えたことを大きな声で発表することが慣習となった。	A
9		特別支援教育の充実を図る。	校内委員会を設置して，校内での推進の充実を図る。	校内委員会で該当児童への対応検討 特別支援教育や諸障害について研修	校内委員会やｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰを中心として取組が組織的に推進されているか。 ☆毎日の職朝とともに，必要に応じて，情報交換や指導に当たっての共通理解を図る機会をもつ。 ・外部講師（特別支援学校の支援コーディネーター等）を招いて実態を見ていただくような研修会をもつ。	職員朝礼を中心として，子どもの情報交換が有効に働いている。何事にも全職員で対応したり，協力したりする体制が整っている。一人で問題を抱え込まないようにお互いに気配りを続けたい。特別支援学校から講師を招いて児童の実態を見ていただき，それを基に校内研修を行った。研修会には，隣接する保育園にも声をかけ2名の先生に参加していただき，より一層保育園小学校の連携が図られるようにした。	A

分析・改善方策

・本年度重点を置いてきた算数・国語科の指導法の工夫による分かる授業の創造については，外部講師を招いた研修会や授業研究などにより，子どもたちの熱心な学習活動がよく見られるようになった。また，家庭学習の定着や学習支援ボランティアの皆さんのお陰で，子どもたちも漢字や計算力に自信を持ちつつある。家庭学習の定着等はまだ不十分なので，家庭学習の手引きを基にした学習習慣作りに力を入れたい。
・基本的な生活習慣の定着では，教育講演会を開催したり，学級懇談会で話し合ったりすることでかなり家庭の協力が得られるようになった。「挨拶・はきもの・はい」の習慣はまだまだである。今回の結果を学校便りや参観日の全体懇談会等で保護者にお知らせし，学校・家庭・地域みんなで協力して定着できるように進めていきたい。
・職員朝礼を中心に気になる児童の情報交換が大いに役立った。また，外部講師を招いた特別支援に関する研修会を開くこともできた。今年は相手の気持ちを考えない発言や行動が原因となる事例がどの学年にも起こった。互いを尊重し，助け合える人間関係づくりを進めるにはどうしたらよいか，より高い集団作りを目指して研修し，実践していく必要がある。

学校関係者評価

・実態調査や意識調査を基にしっかりと自己評価し，具体的かつ的確に分析・改善策が示されている。学校の中にPDCAの評価システムが定着している。
・学習支援ボランティアが機能しているようである。更にコーディネーターとの連携の中で有効に活用するよう努力してほしい。
・生活習慣や学習習慣などについては，家庭との連携の上，粘り強い取り組みにより定着を図る必要がある。人権意識の高揚についても然りである。
・中川小の子どもたちは，楽しい学校生活を送っている様子が伺える。「分かる，できる喜び」など，真の楽しさを実感できる地域運営学校として，さらなる発展を期したい。

専門評価			
評価項目	観点	学校の現状（〇優れている点　△改善が望まれる点）	改善の方向性
1. 自己評価の状況	①取組体制 ②方法の開発・共有 ③実践・実施 ④成果と課題	〇前年度の学校評価で指摘された課題の改善に向けた取組が行われている。 〇学校で対応すべき教育課題について適切な項目が設定されている。 △領域－中期目標－単年度目標－具体的計画－達成基準の一貫性が弱く、評価書としての説得力がやや弱いところが見られる。また、項目間のヨコの関連性が分かりにくいところもある。（国語科・算数科に関する中期目標、単年度目標など）	すべての教職員が関わりを持つような体制で学校評価を継続していくことが必要だと思われる。とくに、共有すべき教育上の課題（指導内容、指導方法）を設定し、それについての共通理解を深め、実践することを重視したい。
2. コミュニケーション力の向上	①取組体制 ②方法の開発・共有 ③実践・実施 ④成果と課題	〇日常的な社交関係に欠かせない、あいさつ、受け答えなどは定着している。 〇児童は「おとなしく素直であるが，ややハキハキとしたところに欠ける」という共通認識があり，その背景には少人数の学級に見られる固定化された人間関係が影響しているという点でも共通認識があり、指導上の課題は明らかにされている。 △「コミュニケーション」の内実についてはやや曖昧な点が見られる。	地域の人々との協同的な活動などを通じて，児童が“他者”を意識しながらコミュニケーションを実践するような機会を設け，日常生活に必要な態度やスキルを獲得することを目標として設定し、教育活動の中に位置づけることが検討されてもよい。
3. 不登校児童生徒の解消	①取組体制 ②方法の開発・共有 ③実践・実施 ④成果と課題		
4. 学習不振児童生徒の解消	①取組体制 ②方法の開発・共有 ③実践・実施 ④成果と課題		
5. 学校の組織運営	①取組体制 ②方法の開発・共有 ③実践・実施 ④成果と課題	〇組織のメンバー（児童を含む）を優しく包み込むような、支持的な組織風土が受け継がれている。 〇教職員間で協働的な雰囲気が構築されており、今年度より着任した校長のもとで，基本的な学校経営方針の一貫性を確保しながら，必要な見直しと学校運営の改善も状況を把握しながら行われている。 〇今年度より各教員の研究授業を年2回に増やし、校内研修の充実を図っている。各教員が自己の授業力量を省察するとともに、組織全体としての力量を向上させるうえでも、有益な機会となっている。 〇「互いに関心を持つ、授業を見合う、相互研鑽を積む」といった教職員間での好ましい同僚性が高まっており、創造的な実践に向けて、さらなる向上を望みたい。	教職員数が少ないなかで校務分掌上の役割分担を行い効果的な組織運営が目指されている。一方で、多忙感も見受けられるので、学校評価を生かしながら、学校運営上の教育・指導と関連性の高いものに比重を置き、過重な負担にならないよう、より効果的で焦点化された目標を設定するとよい。
6. 学校と保護者・地域社会等との連携協力	①取組体制 ②方法の開発・共有 ③実践・実施 ④成果と課題		
7. 特別支援教育	①取組体制 ②方法の開発・共有 ③実践・実施 ④成果と課題	〇学級および学校の全体的な雰囲気が落ち着いており，日常的な生活においては支援の必要な子にも落ち着きが見られる。 〇また，支援が必要と思われる児童の状況について全教職員が情報を共有し、指導についての共通理解を深めている。また，特別支援教育支援員は担任教諭との連携をとることはもちろん，管理職をはじめとする他の教職員との情報共有に努めている様子がうかがえる。 〇その結果として、管理職をはじめ、特別な支援を要する子どもに関する様々な諸条件の充足の必要性が理解されている 〇しかしながら，学習に必要な集中力の持続や情動面での安定を維持することに困難があり，落ち着いた学習環境を確保し，障害による学習上又は生活上の困難を克服するための措置を取るため特別支援学級の設置の必要があるという教職員の共通認識がある。	町教育委員会当局におかれては事情を的確に把握され，適切な措置を講じていただきたい。
8. 学校の総合的な状況	学校の諸条件（スタッフ、自然環境、社会環境など）を考えると、学校の特色をさらに強く打ち出せるような、より高度な取組を期待したいところである。しかし、その際には、真に重要な教育理念に基づき、児童の学力保証も同時に達成できるような重点的な教育目標の設定を行い、周到な分析と計画に基づいた取組とすることが必要である。そのためには、中長期的な目標設定を行い、できるだけ具体的な達成指標（と努力目標）を設定し，教職員の共通認識と共通理解を深めていくことに留意し，学校全体の取組として進めて行くことが重要であろう。また、教職員の心身の健康には十分留意されたい。		

来年度の重点・方針
①「進んで学ぶ」領域では，予習を授業に生かす工夫をさらに深め，「分かる・できる」喜びを実感する授業研究を進める。朝の音読の成果発表会を続けることによって，意欲と自信を持たせる。英語学習では，歌やゲームを取り入れた授業をさらに進め，参観日に多くの学年で公開することにより保護者に楽しい実態をお知らせする。学習支援ボランティアがより有効に機能するよう模索し，試みを続ける。 ②「元気で明るい子ども」領域では，矢掛あはは「挨拶・履物・『はい』という返事」と中川あはは「早ね・早起き・朝ご飯」の習慣の徹底を家庭の協力を得ながら強力に進める。 ③「優しく仲のよい子ども」領域では，「職員朝礼での情報交換，早期対応，全職員で協力」を合言葉に積極的に取り組む。互いを尊重し，助け合える人間関係づくりを進めるために，外部講師を招いた職員研修を実施する。